

お寺などで六体のお地藏様をご覧になったことのある方も多いと思います。左手には鉢や宝珠を持ち、右手にはしゃくじょう錫杖という杖を持ち、お坊さんのように頭を丸めて、赤いよだれか涎掛けや、毛糸の帽子などをかぶったお姿に微笑ましく感じる方も多いと思います。

お地藏様は、大地を象徴したインドの神様が由来ともいわれます。大地は様々なものを産みだす宝庫、蔵でありますから、お地藏様と呼ばれるのです。またお地藏様は弱い子どもを育む母親の姿にも重なることから、子どもを守って下さる仏様として信仰を集めてきました。仏教で考えられている六つの世界の全てにいらっしゃるだけでなく、お寺の入口近くや、道端に立ち、目立つ赤い衣装や、僧侶の旅の道具であるしゃくじょう錫杖という杖を常に携えている姿は、子どもに寄り添うことを片時も忘れず、いつでも助けに行ける態勢を整えているかのようで、心強い限りです。

そんなお地藏様にご縁を結んで頂くべく、毎月二十四日はお地藏様の縁日とされ、特にこの七月、八月のお盆の時期は「地藏盆」と名付けられ、特別な縁日とされています。

今でこそ平均寿命では世界有数の日本ですが、これには乳幼児の死亡率が世界でも最低水準であるという事実も大きく影響しています。しかしほんの一昔前は乳幼児の死亡率は高く、古いお墓のぼし墓誌に刻まれた子供の数は実際の数のほんの一握りに過ぎません。そんな昔の多産だった時代の子どもを幕末に初代駐日公使を務めた英国人オールドコックは『大君の都』という日本滞在記の中で、「半身、または全身裸の子どもたちが他愛も無いことで、わいわい騒いでいるのに出くわす。それにほとんどの女性が少なくとも一人の子どもを胸に、往々にしてもう一人の子ども

## 『 禅のこころ -曹洞宗- 』

---

を背中におぶっている。まさしくここは子どもの樂園だ。」と、書き残しています。

しかし現代日本は果たして子どもの樂園といえるでしょうか。最近ニュースではしばしば子どもの虐待が報道されています。また子育て放棄、ネグレクトの親から離れて共同生活を余儀なくされている子どもたちも増えています。そして六人に一人の子どもが貧困状態にあるとも言われています。更に子どもの騒ぎ声を苦痛と感じる大人も増えています。

日本も批准している「子どもの権利条約」が国連で採択されて、今年で三十年目にあたります。それは子どもたちの「生きる権利」「育つ権利」「守られる権利」「参加する権利」を四つの柱としています。このような権利条約を採択しなければならぬ程に子どもの居場所が脅かされているということです。

この現状をお地蔵様はどうご覧になっているでしょうか。今、私達大人が学ばねばならないのは、お地蔵様のいつでも、何処にでも助けに行く行動力と、大地のような懐の深さなのではないかと思います。

— 終 —